



《発掘調査の概要》

建物群東側の調査その2 (纏向遺跡第183次調査)

1. はじめに

桜井市教育委員会では桜井市大字辻56番1において纏向遺跡第183次調査を実施しました。この調査は平成20年度から行われている範囲確認調査の9回目の調査となります。今回も土地所有者や地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

さて、今回の調査の目的は、これまでの範囲確認調査で検出した、庄内3式期以前（3世紀中頃以前）の計画性が高い建物群（建物B・C・D）よりも東側の遺構の状況を確認することです。建物群の東側を調査するのは2回目で、1回目は平成25年度に実施した第180次調査です。第180次調査は第183次調査地の西隣です。

出土遺物の整理作業を経ていないため、現時点で各遺構の厳密な時期決定を行うことは困難ですが、調査段階での所見に基づいて解説したいと思います。調査期間は平成26年10月27日から平成27年2月6日の約3ヶ月で、調査面積は214㎡です。



写真1 これまでの調査地と今回の調査地の位置（上が北）



2. 検出された遺構と遺物

調査地は奈良盆地の縁辺部、大和高原の麓にある東西に細長い微高地（太田北微高地）上にあり、JR桜井線の巻向駅の北東に所在します。微高地の南北には古い川の跡があり、比高差2m程度の谷を形成しています。調査地は現況で水田となっており、標高は約75.3mです。東西約10.0m、南北約20.0mの調査区を設定しています。遺構検出面は浅く約74.9mです。線路の西側より遺構検出面は約0.6m高くなっています。

これまでの範囲確認調査では、第162次調査地や第166次調査地を中心に、複数時期の遺構面が存在することが確認されています。しかし東に行けば行くほど上部の遺構面を構成する整地層や包含層が薄くなり、第180次調査地では整地層は確認されていません。第183次調査も同様でした。そのため遺構は地山面で検出しています。ただし、遺構が多い点は第162次調査地や第166次調査地とよく似ています。時期の分からない柱穴も多いですが、出土遺物の大半は3世紀から4世紀（庄内式期から布留式期）のものであることから、多くの遺構が3世紀から4世紀のものと考えられます。主要な遺構としては1棟の建物と溝、土坑を検出しています。以下では主な遺構について見ていきましょう。

(1) 建物

建物H 調査区の南半で検出した小規模な掘立柱建物です。中央に柱のない側柱建物で、東西2間（約4.4m）、南北2間（約4.4m）の平面正方形となります。一辺約0.6～0.8mの長方形の柱穴で構成されており、複数の柱穴で、柱を抜き取った痕跡が認められます。柱抜き痕跡から柱の太さは約0.2m前後と推定できます。

また、建物Hの南北には一辺約0.4～0.5mの長方形柱穴が建物Hに平行して東西に並んでいました。これは建物に関連する柱列の可能性がありそうです。

建物Hは他の遺構との切り合い関係から、布留0式期（3世紀後半）に作られ、壊された建物と考えられます。これまで見つかった大型建物を含む建物群（建物B、C、D）よりも新しい時期の建物と言えるでしょう。方位は真北に対し約7～8°東に傾いています。この方位は建物Hの北約11.2mを通る東西溝SD-1006とよく似ています。



写真2 調査区全景（北西から）



写真3 建物H（北西から）

(2) 溝



写真4 SD-1006（北西から）

東西溝SD-1006 調査区北側で検出した東西溝で、第180次調査の続きを検出しました。幅約1.5m、深さ約0.7m、長さ21.5m以上をはかります。

溝は調査区外の東西に続いていきます。出土した土器から布留0式期（3世紀後半）に埋没したものと考えられます。建物Hとこの溝は平行し、出土土器の時期も近いことから両者は共存する可能性があります。

斜行溝SX-1001 調査区を北東―南西方向に斜行する溝です。調査区外にさらに続いていきます。第180次調査でも検出していましたが、SX-1001上面から掘り込まれた遺構を保護するため、ほとんど掘削してあらず、時期や形状がわかっていませんでした。

今回の調査では一部を溝の底まで掘り下げ、幅が約3.2m前後、深さ約1.0mをはかる断面台形の溝であることがわかりました。埋没時期は土器からみて庄内2式期（3世紀前半）を遡らないと考えられます。

SX-1001の南西側の延長線上はこれまでに第168次・第173次調査で発掘調査を行っています。しかし溝の延長部分は検出していません。そのため途中で止まるか、屈折するものと考えられます。

ところで、第180次調査で検出した建物FはSX-1001が埋没した上から作られていることがわかっています。SX-1001の埋没時期が3世紀前半を遡らないので、建物Fも3世紀前半以降に作られたと考えられます。建物Fは建物B・C・Dと共存する可能性があるため、仮に共存すれば、建物B・C・Dの時期を考える上で重要な手がかりを与えることができました。



写真5 SX-1001（北東から）



写真6 SX-1001断ち割り
出土土器群



写真7 土坑SK-1005（西から）



写真8 出土した卜骨

(3) 土坑

土坑SK-1005 楕円形の土坑で、長径約2.2m、深さは約1.1mをはかります。土器から布留0式～1式期（3世紀後半から4世紀初頭）にかけて埋没した遺構であると考えています。建物Hから北西に約4.0mの距離にあります。

この土坑の下層から卜骨が1点出土しています。卜骨とは骨に熱を加えてヒビを入れ、ヒビの形状によって占いをおこなうための道具です。このような骨を用いて占う風習は古代の東アジアに広く認められるものです。

卜骨はイノシシの右肩甲骨を素材とするもので、若い成獣の骨を用いています。肩甲骨を削って平坦にし、焼く箇所を薄く削った後に点的に焼いています。現状で長さは約16.7cm、幅は約6.7cmをはかります。なお、他にこの土坑からは祭祀関連の遺物は検出されていません。

3. まとめ

今回の調査では、3世紀中頃以前の建物群（建物B・C・D）に関連する可能性のある遺構を検出することはできませんでした。ただし関連遺構がないからといって、建物群の東端が明らかになったわけではありません。東端を限る施設が未発見であることや、線路の西側と遺構の密度がよく似ていることから、さらに東側に居館域が広がる可能性があります。

建物Hや東西溝SD-1006は、3世紀中頃以前の建物群が廃絶した後の施設であると考えられます。大型建物廃絶後も何らかの施設が存在したことを示しています。また、斜行溝SX-1001は3世紀中頃以前の建物群の上限を考える上で重要な遺構となる可能性があります。

ト骨は近隣では弥生時代のものが唐古・鍵遺跡で多く見つっていますが、古墳時代の事例は珍しいもので、纏向遺跡でどのような祭祀がおこなわれていたのか、具体的に知ることができました。（森暢郎）

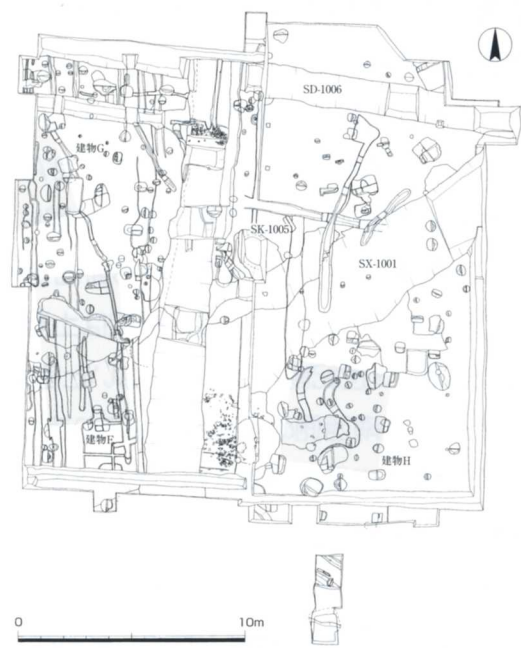


図1 調査区平面図

建物群北西の調査（纏向遺跡第182次調査）

纏向遺跡第182次調査は平成26年の夏に行った発掘調査です。調査場所は大型建物を含む建物群の北西側に位置します。今回の調査ではこれまで遺構の状況が不明であった、建物群よりも北側の状況、特に建物群が建っている微高地から北の谷部を確認することを目的としました。

微高地より1段低い谷部分を中心に、一部微高地にかかるよう調査地を2箇所設定しています。南北に長い約3×30mの調査区を1区、東西に長い約5×14mの調査区を2区と呼んでいます。調査面積は1区と2区を合わせて165㎡となります。調査の結果、1区、2区ともに1段低くなった谷部分ではほとんど遺構が認めることができませんでした。遺構が密集して認められる微高地とは全く異なる状況であることが判明しました。

1区の北半では北に落ち込んでいく地形も捉えることができました。これまでの調査では、微高地の北側には古墳時代から古代にかけての川の跡が見つかっています。今回見つかった落ち込みはこの川に向かって下ってゆく地形をとらえたものと考えています。（森暢郎）



写真9 1・2区全景（上が南）



写真10 1区全景（南から）

纏向遺跡183次調査の現地説明会が開催されました！

纏向遺跡第183次調査の現地説明会が平成27年2月1日に開催されました。約1,100人の方にお越しいただき、盛況のうちに現地説明会を終えることが出来ました。地元関係者様には現地説明会開催に際しまして様々なご配慮を賜りました。たいへんありがとうございました。

当日は発掘調査地のほか、今回出土した土器や、ト骨などをご覧頂きました。何をうらなったものか、多くの方が興味津々の様子でした。



写真11 現地説明会の風景

《『纏向学研究』第3号が刊行されました》

纏向学研究センターでは、研究活動の一環として研究紀要『纏向学研究』を発刊しています。平成26年度は第3号を発刊いたしました。

今回は、大阪経済法科大学教授の前田晴人氏より「三諸の神について」、文部科学省教科書調査官の鈴木正信氏より「『大神朝臣本系牒略』の原資料と引用史料」、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員の森岡秀人氏より「倭国成立過程における「原倭国」の形成-近江の果たした役割とヤマトへの収斂-」、奈良教育大学教授の金原正明氏と文化財科学研究センターの金原正子氏に「纏向遺跡における開発と植生」と題して論考をいただき、当研究センター研究員の木場佳子と橋本輝彦が「桜井市 等彌神社所蔵の考古遺物の調査」として資料紹介を行いました。

本号でも文献史学や考古学など、多方面から玉稿をいただくことができました。今後も多様な研究をもとに「纏向学」を模索していきたいと考えています。なお第3号についてはPDF形式で纏向学研究センターホームページにて掲載を予定しています。



《『纏向遺跡発掘調査報告書3』刊行！》

桜井市教育委員会では、『纏向遺跡発掘調査報告書3-第35・63・72次調査-』を桜井市纏向学研究センター編集のもと刊行しました。

本書は桜井市教育委員会が過去に調査し、未報告だったものの一部を報告したものです。このうち第72次調査は纏向遺跡辻地区の建物群のほど近くで調査したもので、奈良時代の、木材を割りぬいた井戸枠やたくさんの土器が出土しています。土器の中には「宮内」と墨書された土師器や、漆を運搬する際に容器として用いた須恵器壺などがあり、当時の纏向地域に文字を書ける人がいたことや、漆を用いる工房があったことが推測できます。纏向遺跡ではたくさんの遺構・遺物が見つかりますが、その多くは古墳時代前期のものです。今回報告した奈良時代の遺構や遺物がまとまって検出された例はほとんど無く、その意味でも貴重な資料を報告できました。なおこちらもホームページで公開しています。



《東京 日本橋の奈良まほろば館でイベントに参加しました》

天理市、桜井市、田原本町の文化財や観光地を首都圏の方々にご紹介するイベント、「ヤマト王権はいかにして始まったか～ムラから国へ 唐古・鍵遺跡、纏向遺跡、オオヤマト古墳群～」が、平成26年8月14～26日の間、東京の奈良まほろば館で開催されました。

8月16・17日の両日は、ウィークエンドスペシャルとして天理市教育委員会・当センター職員によるミニ講座や古代ミュージカルの上演、勾玉作り、古代のお金の鑄造体験、纏向遺跡から出土した土器の展示などが行われ、当センターからは森・木場の両所員が参加してまいりました。

ミニ講座では、森所員より「纏向遺跡と国の成り立ち」と題した講演をおこないました。古代のお金の鑄造体験では、昔の技術を再現して制作された和同開珎や富本銭の鋳型に金属を流し込んでお金を作る工程を、現代の硬貨との作り方の違いや、古代のお金についてなどの解説を交えながら体験して頂きました。

両日で約150人の方がご参加下さり、盛況のうちに終えることができました。ご参加・ご協力頂いた皆さん、ありがとうございました。



写真12 お金を鑄造してみよう！



写真13 講演する森所員

《桜井市纏向学研究センター東京フォーラムⅢ 「纏向出現 ―邪馬台国東遷説を考える―」開催しました！》

平成26年11月16日（日）に東京 有楽町のよみうりホールにて、東京フォーラムⅢ「纏向出現」を桜井市主催、読売新聞社後援で開催し、約900人の方々にご来場いただきました。

今回は「邪馬台国東遷説を考える」をテーマに、北部九州などで台頭した勢力が後に近畿地方に移って邪馬台国が成立したとする“邪馬台国東遷説”について、講師をお迎えしてご講演いただき、その後講師により鼎談を行いました。午前の部では、まず当センターの森暢郎所員より纏向遺跡の最新の調査報告があり、続いて講師の元國學院大學教授の柳田康雄先生より「卑弥呼は伊都国から」としてご講演をいただきました。午後には俳優で日本考古学協会会員の荻谷俊介先生より「東遷は本当にあったのか？」としてご講演をいただき、その後講師のお二人と寺澤薫所長が邪馬台国東遷説をテーマに鼎談を行いました。鼎談では、邪馬台国の成立に関わる勢力や纏向遺跡と九州とのかかわりなどについて、様々な議論が交わされました。

多数のご参加、本当にありがとうございました。

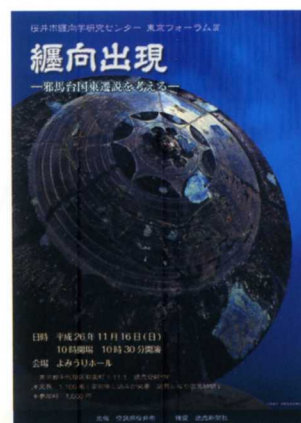


写真14 鼎談に聞き入る来場者

《第3回縄向学セミナー 「原倭国の形成と縄向遺跡」を開催しました！》

平成26年7月26日（土）に桜井市立図書館研修室1で第3回縄向学セミナー「原倭国の形成と縄向遺跡」を開催しました。今回は奈良県立橿原考古学研究所共同研究員で、当研究センター共同研究員の森岡秀人先生にご講演をいただき、その後寺澤薫所長と対談をおこないました。

森岡先生は日本列島に倭国が成立するに先立って、「原倭国」が形成されていることを想定され、弥生時代後期中頃～後半に、近江地域を要として近畿・東海を覆う地域間の連携があったことを論じられました。

対談では日本列島における国の形成や、邪馬台国・卑弥呼と「原倭国」との関係、縄向遺跡の衰退と奈良市の佐紀遺跡のかかわりなど、様々な論点について意見が交わされました。当日お越しの観客の方々は、森岡先生の出される新しい考え方に興味津々の様子で聞き入っておられました。当セミナーのご講演内容は加筆・修正の上本号5ページに掲載しました『縄向学研究第3号』に掲載しております。



写真 15 講演される森岡先生



写真 16 議論を交わす講師と所長

《第4回縄向学セミナー 「花粉が語る縄向遺跡」を開催！》



写真 17 講演中の金原先生



写真 18 対談される金原先生

平成27年1月24日（土）には縄向学研究センター主催、桜井市立図書館共催の第4回縄向学セミナー「花粉が語る縄向遺跡」を開催しました。今回は奈良教育大学教授の金原正明先生に標記の題でご講演をいただき、その後寺澤所長と対談をおこないました。

縄向遺跡でベニバナやバジル類の花粉を検出した調査では、花粉の特性から染色や薬用に用いられたと考えられること、縄向遺跡辻地区の大型土坑で出土した多量の桃核や栽培植物の種実には食べられた痕跡がないこと、サクラ属モモ型の花粉が認められることから周囲にモモ畑が存在した可能性があることなどを指摘されました。そして縄向遺跡は開けた土地であったこと、縄向古墳群は形成後あまり人の手が入らなかったことなどが花粉の分析からわかることを指摘されました。

当日お越しの方は小さな植物の種実や目に見えない花粉から明らかにされる当時の縄向遺跡の環境に驚いておられる様子でした。

《纏向遺跡を掘る調査員たち 7》

桜井市の調査員紹介コーナーです。今回は松宮昌樹さんです。松宮さんは纏向遺跡が栄えた時期の土器研究が専門で、近年では纏向古墳群のひとつ、矢塚古墳周辺の調査を担当しています。

松宮 昌樹 (まつみや まさき)

考古学に興味を持ったのは、子供の頃に邪馬台国関連のTV番組で箸墓古墳の周辺での発掘映像を見た時でした。ただ実際に歴史に関連する職に就きたい、奈良に来たいと考えたのは大学進学時で、しかも折角なら三輪山麓で発掘に参加したいと思っていた時、幸か不幸か桜井市で調査に参加している先輩と知り合いになり、誘われるまま初夏から希望通り桜井での発掘三昧の日々が始まりました。そして今に至ります。現在は三輪山を仰ぐこの土地が国の発生と発達にどう関わったかに興味があります。纏向遺跡をはじめ、初瀬川(大和川)周辺には他にも多くの遺跡が残っています。どれもが国の形成に重要な役割を果たしたと思われる遺跡ですので是非皆さんも注目してみてください。



埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ



埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成27年9月27日(日)までの期間、桜井市立埋蔵文化財センター速報展21『50cm下の桜井』として、平成26年度に桜井市内で行われた発掘調査成果の速報展を行います。今回は、本号でご報告した纏向遺跡第183次調査のほか、桜井市南部に所在する谷遺跡や、安倍寺跡の調査、弥生時代の大規模集落遺跡である大福遺跡の発掘調査などについて展示しています。

展示開館時間 9:00~16:30 (入館は16:00まで) 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日
入館料 / 大人200円 小・中学生 / 100円 (20名以上の団体は大人150円 小・中学生50円)

刊行物のご案内

纏向学研究センター紀要『纏向学研究』第3号 800円

ガイドマップ『改訂第5版 纏向へ行く!』200円(2014年3月改訂)

※販売していない刊行物の一部は当研究センターホームページで公開しています。

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内(公財)桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366

<http://www.sakurai-maibun.nara.jp/>

編集後記

本号では、纏向遺跡第183次調査の成果を掲載いたしました。このほか、本号では記事にできませんでしたが「纏向考古学講座」も例年通りおこなっています。紙面の余裕がないほど、さまざまに事業をおこなっているということで、一步一步ですが「纏向学」の研究・調査・活用の活動の幅を広げることができていると考えています。今年度も様々な企画を行っていますので、ぜひホームページ等でチェックしてみてください。(M)

纏向考古学通信 Vol.8

発行 平成27年6月30日

編集 桜井市纏向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339

TEL 0744-45-0590

FAX 0744-45-0590

<http://www.makimukugaku.jp>

纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄付いただいた方に配布しています。

